
港町のスナックはてんやわんや

ヒジャイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

港町のスナックはてんやわんや

【Nコード】

N3713G

【作者名】

ヒジャイ

【あらすじ】

やんばるの小さなスナックに今日も酔っ払いたちが集う。酔っ払いたちの顛末。

ウチナーの極普通のスナックの酔っ払いたち

インターネット小説によろこそいらつしゃいました。インターネット小説は世界を駆け巡る。ネットからネットへ渡り歩き、あつという間に世界を駆け巡る。私のインターネット小説は世界を駆け巡る。きみはアメリカ人ですか、それともスイス人ですか。きみがブラジル、イギリス、カナダ、ロシア、イラク、タイ、オーストラリア、オーストリア、スウェーデン、ドイツ、チリ、コロンビア、キューバ、トルコ、ギリシャ、イタリア、スペイン、台湾、メキシコ……どの国の人間であるにしても私のインターネット小説に訪問してくれて感謝します。このインターネット小説はウチナーという島から発信しています。私は世界の誰かが私の小説を読んでくれることを願って、インターネットに小説を掲載している者です。

インターネットは素晴らしい。なにしろ小さな島の無名の私の小説が世界中の人間に読んでもらうことができるのです。しかも、インターネット小説を公開するための経費はごくわずかなのです。貧乏な私でも世界中の人間を対象に小説を掲載できるのです。素晴らしい世紀になりました。

ところできみはウチナー島を知っていますか。多分知らないだろうなあ。いや多分ではなくて確実にきみはウチナー島を知らないだろう。なにしろウチナー島は世界地図で見ると砂粒のようなとても小さな島なのだ。世界地図できみはウチナー島を見つけないことができないかも知れない。ウチナー島とはそんな島だ。そんな微小なウチナー島の北の方にやんばると呼ばれている過疎地帯がある。この小説はそのやんばるの片隅にあるちいさな港町のスナックに集まった極く普通の酔いどれたちの顛末の小説だからもしかするときみには

詰まらない小説であるかも知れない。

まあこの小説は小説としての価値があるのかないのか私には分からない。もしかすると小説としての価値はないのかも知れない。価値がないなら書くなときみは言うかも知れない。しかしそのように言われると、書こうが書くまいがそれは私の勝手だと言いたくなる。きみがこの小説を読もうが読むまいがそれはきみの勝手であるのと同じくらいに書こうが書くまいが私の勝手なのだと言いたくなる。きみはきみで読者として自由だし私は私で小説家として自由であるのだ。ここまで読んできてこの小説を放り投げたいのならどうぞインターネット小説なのだから「ほうり投げる」という表現は適切ではないが「放り投げる」という表現の方が気分的にはいい）、遠慮しないで放り投げたまえ。それはきみの自由なのだから私は文句は言わない。それにきみに途中で放り投げられても私の心はいささかも傷つかないのだから。

きみに途中で放り投げられても私の心がいささかも傷つかないというのは私が傲慢で神経が図太いというわけではないことをことわっておく。むしろ私はとても臆病で繊細な神経の持ち主なのだ。私が傷つかないというのは精神的な問題ではなく現実的にそのようなシステムになつていてということと言っているのだ。つまりだ。君がこの小説を読んでいる頃には私はとっくの昔にこの小説を書き終えている。私はこの小説を最後まで書いて、私のホームページにアップロードを終えたからきみはこの小説を読むことができる。私のホームページは無名だし最初から多くの人に読まれるはずはない。私は私の小説を読んでもらうために他のインターネット小説のホームページを訪問して掲示板に書き込みをやりたり、英語翻訳やロシア翻訳など外国語の翻訳ソフトを利用して世界のあちらこちらの掲示板にもこの小説の宣伝をやった。（自分の小説を英訳するほどの英語力は私にはない。）

つまりだ。きみがこの小説を読んでいる現在は私がこの小説を書いているから大分時間が経過しているということなんだ。きみがこの小説

を読んでいる現在の私は家でごろ寝しているかも知れないし、ひよつとすると何十年という時間が経過して私はすでに老人になってよたよたと痴呆状態で生きているかも知れない。ひよつとするとすでに私は死んでしまいこの世の人間ではないのかも知れないのだ。

だからきみがこの小説を読もうが投げ捨てようが燃やしてしまおうが昼寝の枕にしようが私はきみがこの小説を読んでいることを知る筈がないのだから、きみがこの小説を読んでいることは私には関係のないことなのだし、きみに途中でこの小説を放り投げられても私の心はいささかも傷つかないというわけなのだ。傷つこうにも傷つくことができないのだ。

でも、私の正直な気持ちとしてはきみに最後まで私の小説を読んでほしい。「ここまで読んできて放り投げたいならどうぞ、遠慮しないで放り投げたまえ。」と豪語したのは実は自分の小説に自身のないう裏返しなのだ。小心者の見栄を張った狂言なのだ。きみの気分を害したのなら私はきみに謝る。

小説を読んでもらう前にきみにウチナー島を紹介しておこう。なにしろウチナー島は世界的には無名なのだから、きみはウチナー島について知らないはずだ。だからウチナー島を紹介するのは私の義務なのだ。

きみが日本人ならウチナー島は知っているよね。だってウチナー島は日本の領土だし観光の島だ。修学旅行で多くの中学生や高校生が九州や四国や本州や北海道からウチナー島に来る。ウチナー島が気に入ってウチナー島に移り住む日本人もけっこう多い。

ウチナー島は日本の領土であるからウチナー人は日本人だしウチナー人は日本なのだから「ウチナー島に移り住む日本人」という表現は適切ではないな。「ウチナー島に移り住むウチナー島以外の都道府県の出身者もけっこう多い。」と書かなければね。

ウチナー島は日本一の長寿島として有名なんだ。日本は世界でトップの長寿国であり長寿国世界一の日本の中ではウチナーが一番なの

だ。ということとはウチナー島が世界一の長寿県ということになる。県という名称はアメリカやヨーロッパにもあるのだろうか。県という言葉を使えば日本の中で比較していることになってしまう。世界一長寿の県という表現でいいのだろうか。ううん、悩む。日本語は難しい。世界一の長寿島。世界一の長寿村。ううんなんか今いちしっくりこないな。世界一の長寿地帯。これも変な感じだ。神経質な私はこんなことで数日も悩み続ける。悩み続けて頭が変になりそうだからこれ以上は考えるのは止すことにする。ここで三日間文章が止まってしまった。

とにかくウチナーまたはウチナー島またはウチナー県は長寿世界一でありイギリスやアメリカの長寿研究家や料理研究家がひんばんにウチナー島にやってきてウチナーの長寿の原因を研究している。それが自慢なんだなウチナーの文化人連中は。しかしウチナーの庶民はそんなことを自慢する心の余裕はない。ウチナーの庶民はというとなにしる失業率が八パーセント以上もあり日本で一番高い失業率を誇っているものだから……。誇っているというのは変だな。失業率が高いということは貧乏人が多いということであり誇れるようなものではない。まあ、そういうわけでウチナー島の貧乏な庶民はウチナーが世界一の長寿県であると自慢する余裕もなくあくせくと生活に追われて生きているということだ。

もし君がアメリカ人ならウチナー島なんて全然知らない筈だ。なにしろウチナー島は太平洋の反対側にあるとても小さな島なのだからあの世界一広い太平洋の反対側だよ。要するにアメリカ地図で見ると太平洋という大海の果てにウチナー島はあるのだ。君の学校の世界地図では左の端っこにウチナー島はあるのだ。地図の左端にあるだけではなく北は日本列島、南は台湾、フィリピンに挟まれている微小な島だからきみに関心がないのは私にも理解できる。A3版世界地図で見ると砂粒よりも小さい島だからね。虫眼鏡で見ないとウチナー島は探せない。おいおい虫眼鏡をおもちゃ箱から出すなよ。虫眼鏡で見ないとウチナー島は探せないというのは冗談だよ。肉眼

で見えないということは印刷されていないということだ。印刷されていないウチナー島なのだから虫眼鏡で見つけることなんかできる筈がないではないか。とにかくそのくらい小さな島というわけだ。印刷されるかされないかは印刷する者の気まぐれで決まる。そういう島だということだ。

海の果ての砂粒のような島をアメリカ人の君が知るわけではないし興味を抱くこともないだろう。アメリカはとも広いだけではなく世界を牽引している大国だしね。他の国の位置や文化を知らないアメリカンナショナルリストがアメリカ人の大半を占めるということでもアメリカは有名だ。

「アメリカ人はアメリカ地図を世界地図だと思っている。」
というまことしやかな噂があるくらいだ。政治・経済・文化はインターナショナルな存在でありながらアメリカ人の頭の中味はナショナルリストであるらしいという噂はウチナー島までやって来ているよ。日本、中国、ロシア、フランス、ドイツなどの世界有数の国の政治や文化について知らないアメリカ人はとても多いというのが海の果ての砂粒のようなウチナー島の人々の常識になっているんだ。この常識から推理すると、アメリカ人の百パーセントに近い人がウチナー島を知らないだろうということになる。アメリカ人は知的ナショナルリストなのだからアメリカ人のほとんどがウチナー島を知らないだろうということに私は納得している。くやしい納得ではあるのだがしかし、アメリカ人よ。ウチナー島の人々はアメリカのことをよく知っているぞ。なにしろウチナー島にはアジアで一番大きいアメリカ軍基地が存在しているのだ。アジアのアメリカ軍基地がウチナー島に存在しているのをアメリカ人のきみは知らなかっただろう。どうだ、驚いたか。きみがのんびりと平穏な生活を送れるのはウチナー島の人々がきみの代わりに戦争の恐怖に怯えてあげているからなんだぞ。

古くは朝鮮戦争にベトナム戦争。最近ではアフガン戦争やイラク戦争の戦場にウチナーから多くの兵士や爆撃機が参戦しているのだから

らウチナー島のアメリカ軍基地はアジアの戦争に重要な働きをして
いるというわけだ。だからウチナー島はアジアの国々から怨まれて
いる。だからウチナー島がアメリカと敵対するアジアの国から攻撃
される可能性は高い。いいかアメリカ人のきみ。ウチナーの敵国で
はなくてアメリカの敵国からウチナー島が攻撃されるかも知れない
危機をウチナー島は抱えているのだ。ウチナーの敵国ではなくアメ
リカの敵国である国からミサイルがウチナー島をめぐって発射され、
ウチナー島で大爆発してウチナー島が消滅するかも知れないのだ。
たまったものじゃない。ウチナー島の人々はいつミサイルが飛んで
くるかも知れない恐怖に怯えながら生活をしているのだ。ウチナー
島はアメリカの槍であり盾であり鎧かぶとにさせられているのだ。
いいか、アメリカ人。ウチナー島の人々が戦争の恐怖で怯えている
分だけきみ達は戦争の恐怖から逃れているということだ。きみ達の
代わりにウチナー島の人々が戦争の恐怖に怯えてあげているという
ことだ。いわゆるウチナーはアメリカの戦争恐怖の請負人というわ
けだ。

でもこの話は止めることにする。政治の世界は難しいし、こんなこ
とを話せば話すほどに私は惨めな気持ちになる。

ところで、きみはアメリカンナシヨリストであるからウチナーを知
らないしウチナーには興味もないだろう。しかし、よく聞けよ。ウ
チナーにはアイゼンハワー大統領が来たし、クリントン大統領だっ
て来たのだ。歴代のアメリカ大統領の中でも燦然と輝やくあのクリ
ントン大統領がウチナー島に来たのだぞ。なぜ来たのか忘れてしま
ったが真正銘のクリントンアメリカ大統領がこの砂粒のように小
さいウチナー島に来たのだ。きみの町にアメリカ大統領が来たこと
なんてないだろう。ふん、ざまあ見るだ。きみの田舎にはアメリカ
大統領が一度も来たことがないのにウチナーには二人のアメリカ大
統領が来たのだよ。

ウチナー島は世界がよく見える。

二人だぞ二人。どうだ。きみの田舎よりウチナー島の方がアメリカのお偉いさんにとっては重要な存在であることが分かっただろう。どれだけウチナーがアメリカにとって重要な存在であるかということとをきみは分かなければならない。きみの田舎よりもウチナー島の方がアメリカにとっての存在価値は数倍も高いのだよきみ。分かったかい。

もしきみが中国人なら大昔はウチナーと中国は親しい関係であったことを伝えておこう。ウチナーの文化は中国文化に影響を受けている。現在もささやかながら中国と交流はある。でも、きみはウチナーのことを知らないよね。中国と比べてウチナーはちっぽけな存在だから。しかし、君の国が社会主義になったお陰でウチナーは非常に迷惑している。ウチナーには強大なアメリカ軍基地があるのだがそれはきみの中国が資本主義アメリカ国家と対立する社会主義国家であるためだ。社会主義国家と資本主義国家の対立という覇権争いに、軍事力も政治力も経済力もない弱小ウチナーは海に浮かぶ木の葉のように翻弄されている。力もない金もない秀でた知恵もないウチナーは弱い者の惨めさを噛み締めながら生きているのだ。この悔しさや空しさをきみは理解できないだろうな。

弱者ウチナーが笑顔で生きる社会になれるかどうか、弱者ウチナーがおおらかに生きれるかどうかはきみの重要な課題でもあるんだよ。きみの力で中国をさっさと民主主義国家にしてくれよ。頼む。お願いだ。きみならできる。ええ、社会主義と民主主義の違いが分からないというのかねきみは。やっぱりそうだったのか。きみは社会主義と民主主義の違いが分からないのか。・・・

冗談だよ冗談。君に社会主義をひっくり返す実力も気力も思想もないことは先刻承知だ。一瞬でも私がきみの実力を信じたなんて思うなよ。まあ世の中はなるようになれさ。

きみがロシア人ならきみはウチナーとは全然関係ないと思っていると思うが冗談じゃないよ。ロシアはレーニンの社会主義革命によって中国よりも早く社会主義国家になった。ロシアは周囲の国を取り込んで強大な社会主義国集団であるソ連邦を形成していったよな。そしてアメリカと対立した。アメリカとの対立は中国よりもソ連邦が先だ。ロシアが革命なぞ起こさなければ社会主義圏と資本主義圏の対立なんかなかったのだぞ。なぜロシアはウチナーの人々が命の危険を感じながらびくびくして生きていかなければならないようにするための革命なんか起こしたのだ。

1950年代から60年代のウチナー島にはザンパ岬、オンナ、イシカワ、カツレン、フテンマ、チネン、ヨザ岳、ナハのアメリカ軍基地に地対空ミサイルのナイキハーキュリーズがソ連と中国に向かって立ち並んでいた。ナイキには核爆弾を搭載しているという噂さえあった。噂だけだね。ということからウチナーとロシアは関係ないどころかとも関係が深いということがわかっただろう。ロシアでロシア革命が起こり、ロシアから亡命したトロツキーをメキシコまで追いかけて暗殺した陰気で横暴なスターリンによるスターリン主義社会主義国家の性で社会主義圏と資本主義圏の対立がますます高まっていった。その為にウチナー島には強大なアメリカ軍事基地ができたのだ。ロシアの性でウチナー島の人々は核戦争と死の恐怖に怯え続けたのだ。それは事実だ。いいかロシアのきみ。これは否定することができない事実なのだ。

ロシアとアメリカの対立が激化して、もし第三次世界大戦が勃発した時、ソ連や中国のミサイルが最初に飛んで来るのはウチナー島であり、ウチナー島は第三次世界大戦が勃発すれば世界で最初に一瞬の内に消えてしまう運命だろうと信じ、ウチナーの人々は毎日怯えて生きていたものだ。きみに分かるかなあの不安な気持ち。ウチナーの人々は今でもロシアの動きには注意を払っているのだ。そう言えばプーチン大統領がウチナーに来たことがあった。ロシアもウチナーの存在は気になるようだ。きみが住んでいるロシアの田舎よ

りウチナーの方をロシア大統領は知っているし恐れてもいる。ロシアの片田舎でこのうと生きていくきみよりウチナーの人間の方がロシアのことをよく知っているかも知れないな。プーチン大統領は政治的に敵対しているブルジョアジーを政治権力で潰したり、知事を大統領が任命して中央集権を強化していることをウチナーの人々はみーんな知っているぞ。ロシアの片田舎に住んでいるきみはそのことを知っているのかな。いや知ってはいないだろうと私は確信している。ロシア女のでかい尻を追っかけて赤の広場で転んだのはきみだろう。やはりロシアはスターリン主義の遺伝子が残っているねえ。きみさあ、そのままだとロシアの民主主義は崩壊してしまうよ。少しはロシアの政治・経済を勉強してくれ。畑で小麦を育てている場合ではないよ。さっさと小麦畑を整地して工場を作るのだ。農業をやりながら民主主義を主張するのは愚の骨頂だからな。民主主義国家というのは資本主義経済の発達なしには成就できないことをとつくの昔にマルクス大先生が説明しておられる。きみは一日も早く農民を止めて商売人になるのだ。それが民主主義国家になる早道だ。ロシアが再びスターリン型社会主義国家になってしまわないかウチナーの人々は非常に心配しているのだ。ロシアがスターリン型社会主義国家になつてしまうと再びウチナーの西海岸には何百という長距離弾道ミサイルが立ち並んでしまう。ロシアのきみよ、そのような事態にならないように頑張ってくれ。とにかくロシアが本当の民主主義国家になってくれないと平和を愛するウチナーは困るのだ。え、君はロシア革命もレーニンもスターリンもトロッキーも知らないのか。このトロトク野朗め。それでもロシア人が。くそ、なんのためにこんな一生懸命ロシアについて書いたんだよ。これじゃあ私のホラも脅しも台無しだ。ああ、おもしろくない。

きみがドイツ人ならなにも言うことはない。まあ強いて言うならドイツで生まれたマルクス大先生の名前がこの小説の中に出てくることくらいだね。

きみがフランス人かイギリス人かイタリア人であるならやっぱり何

も言うことはない。ウチナーはユーラシア大陸の反対側に位置する世界地図では中国から数センチほど右に海を隔てた砂粒のような島でしかない。インド、タイ、インドネシアは観光地として多くのヨーロッパ人が出かけて行くが、インドネシアの上のフィリピンの上の台湾の上にあるウチナーまでは遠すぎてヨーロッパ人はやって来ない。ウチナーはヨーロッパ人の観光地にはなり得ないようだ。きみにとってウチナーなんて存在していないようなものだし多分この小説の内容も詰まらないと思う。別にそれにとやかく言う積もりはない。

しかし、サルトル、ボーボワール、サガン等の多くの哲学書や小説はウチナーでも読まれているし、イブ・モンタン、シャルル・アズナブール、アダモなどフランスのシャンソンは親しまれているという事は断っておこう。それにイヨネスコ、ベケット、ジュネなどフランスでも余り読まれていない小説がここウチナーでは読まれていた。昔の話だけだね（苦笑）。まあ、とにかくヨーロッパの思想や小説に親んでいる人が少なからずウチナーにも居るということは付け加えておこう。

ウチナーという島はそういうところだ。

きみがウチナーの人なら一言だけ言いたい。この小説について何も言わないでくれ。この小説について批判や非難を一切やらないでくれ。小説とは所詮は作り話だ。作り話の内容に対してウチナーに住んでいるという理由で非難するのは実に大人気ないことだ。大人気ないことはしないでくれ。

さて、序文はそのくらいにして本文に入るとしよう。

この小説はウチナー島の普通の飲み屋の普通の人たちの普通の酒宴の様子を紹介するだけだ。小説というのは普通ではない特別な人物が特別なおもしろい物語を展開したり、性格が異常な人物が奇妙な物語を展開したり、恋愛をテーマにしたりするものだがこの小説は

そういう類の小説ではない。ウチナー島のどこにでも居るごく普通の人間たちがごく普通のウチナーの夜のごく普通の酒宴を過ごしている風景をそのまま切り取った風な小説なのである。この小説は事件も起こらないし恋のドラマもない。無論涙を流すような人間ドラマもない。酒を飲んで普通の会話をやりながら普通に笑ったり普通に怒ったりする内容の小説だ。そういう小説だから小説の舞台はウチナー島のどこでもいい。とりあえずウチナー島の北部に位置する通称ヤンバルと呼ばれている場所を選ぶことにしよう。

え、なぜ小説の場所をヤンバルにするのか。その理由を君は知りたいというのか。だから場所はどこでもいいがとりあえずヤンバルにするだけのことなのだということわっただろう。特別の理由はなにもないよ。

ははあん。君は私が小説の舞台はどこでもいいと言いながら本当はヤンバルでなくてはならない理由があるのだろうと疑っているわけだ。そんな理由なんて全然ないよ。君が疑うなら小説の舞台を南部のシマジリに移したっていいよ。そうしようか。君が小説の舞台を南部のシマジリに移すことを望むなら移してもいいよ。

え、なんだって。本当は最初から私にはヤンバルを舞台にする気はなかっただろうと言うのか。最初からシマジリを小説の舞台にするのを私は決めていたはずであるときみは言うのか。

私がヤンバルを舞台にすれば、

「なぜヤンバルにするのかウチナーのどこでもいいのならシマジリでもいいのではないか。」

ときみが反発するのを見越して私が小説の舞台をヤンバルしようと言ったときみは言うのか。ああ、なんてきみは天邪鬼で疑り深い人間なのだろう。じゃあ小説の舞台を中部のコザにするよ。それでいいだろう。

ほらほら小説の舞台を中部のコザにすると言ったらきみは最初から小説の舞台を中部のコザにすることにしていたと言うだろう。なんてひねくれた人間なのなきみは。不愉快だ。実に不愉快だ。

私はきみのような天邪鬼でもなければ策謀家でもない。妻は私との生活でヒステリーがとてつもなく成長して私の家から巣立って行った。子供たちも高校を卒業するとさっさと私の元から巣立って行った。子供は稀に私に顔を見せに来るのだが、妻は巣立ったまま一度も顔を見せてくれない。こんな淋しい生活を送っている無力な私なのだ。小説を書くしか楽しみのない孤独な男なのだよ。そんな男が天邪鬼であるはずがないだろう。ましてや策謀できるほど頭はよくない。

分かったな。なに分からないのか。頭にくるなあ。それじゃあ君が場所を指定してくれ。君が指定した場所を小説の舞台にすることに。しかし、忠告をする。きみが小説の場所を選ぶ以上はきみもこの小説に責任を負ってくれよ。それにだ。きみがアメリカに住んでいるからといってアメリカのニューヨークとかを小説の舞台にするのは困るよ。日本の東京とかロシアのモスクワを指定するのは言語道断だ。場所はどこでもいいと言ったがそれはウチナー島に限ったことだからきみが小説の舞台を指定するならウチナー島の地図を手に入れてから指定してくれ。え、ウチナー島の地図を手に入れるのは困難だし責任を負わされるのはいやだからきみは指定したくないと言っのか。分かった。ふん、臆病者め。

それにしても困った事態になったものだ。きみが納得しないと小説を進めることができない。いやいや、遠慮しないで進めていいときみが言ってくれても私の心はもやもやしたままだし、もやもやの状態では小説を書き進めることはできない。困った。困った。・・・

・そうだ。いいことを思いついた。それじゃあこうしよう。きみの部屋にあるサイコロをきみが振るのだ。サイコロの目が1と出たらヤンバルを小説の舞台にする。2が出たらシマジリにしよう。3が出たらコザ、4が出たらグシチャー、5が出たらヤヤマ、6が出たらイリオモテを小説の舞台にすることに。それでいいか。よし、それじゃあサイコロを振るのだ。どうだサイコロの目はいくつだ。なに1だって。なあんだ。結局はヤンバルが舞台になるのじゃ

ないか。無駄な時間を使わせやがって。それでは始めるとするか。

美女のアキそしてジユゴン

ウチナー島の北部は人家が少なくそのほとんどが森林地帯になっている。山だらけの地帯ということで日本語では山の原という意味の「山原」、それをウチナーの方言ではヤンバルと呼んでいる。ウチナー島は南部中部北部と三つの地域に区分されているが北部のヤンバルはウチナー島の半分程の広さがあり地形上では北部と南部に分かれ南部を中部と南部という名称で分けてある。ウチナー島の半分を占めるヤンバルは山林地帯が広がり畑作には向いていないし大きい集落はなく小さな集落が海岸沿いに点在している。

ヤンバルのある所に小さな港町があり港町には飲み屋が五軒あった。五軒の飲み屋の中で港町の船着場近くにある小さな飲み屋をスナックワリガーミといった。(昔ばなしのお話ではないからな。)。ワリガーミというのはウチナー方言で底が割れた瓶の意味である。底が割れた瓶に酒をどんなに注いでも一杯にはならない。日本語で底なしとかうわばみという意味がウチナーの方言ではワリガーミという。

スナックワリガーミは今日もいつものようにいつもの常連客の金城や諸味里や池間が酒を飲みつつ世間話をしていた。金城は以前はアメリカ軍基地雇用員だったがリストラされて今は細々と農業をやっている。諸味里も金城と同じアメリカ軍基地雇用員だったがこれまで金城と同じようにリストラされて家業の漁師を引き継いだ。池間は小学校の教諭をしていて三人は小学から中学までは同じ学校に通った竹馬の友である。

スナックワリガーミは仲村俊夫三十六歳と美紗子三十一歳の夫婦と美紗子の従姉妹である二十一歳の絵梨の三人でやっている小さなスナックだ。

ドアが開いて四十代半ばの女が店内を覗いた。

「あーら、まいさん久し振り。」

まいさんとママの芙紗子に呼ばれた女性の名前は大城麻衣子といい年齢は四十六歳。ダイビングを趣味としている麻衣子の肌は陽に焼けて浅黒く、長い黒髪を後ろに紐で束ねている顔は細面できりつとしている。二十数年前にやんばるに移住してきた麻衣子にはどこかしら気品があり彼女がヤンバル育ちでないことは彼女にヤンバル訛りが無いことで分かる。ヤンバル訛りといってもこのスナックに集まる人たちはヤンバル方言で話すのではなく日本の共通語を話すから訛りは発音ではなくイントネーションに現れる。だから文章で訛りを表現することはできないし小説の内容には訛りは一切関係しないから、そのことはきみも了解してくれ。

「今日は一人なの。」

カウンターに座った麻衣子にお手拭を渡しながら美紗子は聞いた。

麻衣子が一人でスナックに来るのは珍しい。

「アキちゃんに呼ばれたの。もう少しでアキちゃんが来る筈よ。」アキはウチナー島の南部にあるウチナーの中心街である那覇に住んでいて麻衣子と同じようにダイビングが趣味で仕事のない時にはヤンバルに来てダイビングを楽しんでいた。

スナックのドアが開いた。麻衣子も美紗子もアキが入って来たと期待したが入ってきたのはアキではなく役所に勤めている高江州正夫であった。

「まいさん久し振りです。」

「まさちゃん。こんばんは。」

高江州はカウンターに座りながら店内を見回してから首をひねった。どうやら待ち合い人がまだ来ていないようだ。高江州は持っている紙袋をカウンターの上に置いた。

「マスター。これを冷蔵庫の中に入れてくれないか。」

「いいけど。紙袋の中にはなにが入っているのだ。」

「それは内緒。後のお楽しみだ。」

「ふうん。後のお楽しみということは紙袋の中身はこの店で披露す

るということだ。」

正夫は自慢げに、

「披露するどころか食べちゃうからね。もう最高なんだから。高江州は再び店内を見回した。」

「まいさん。尚吾さんはまだ来ていないのですか。」

「え、しょうさんが来るの。」

尚吾は麻衣子の夫である。

「あれ、尚吾さんと一緒に来たのではないのですか。」

「そうよ。私はアキちゃんに呼ばれて来たの。そう言えばしょうさんも今夜は誰かに呼ばれていると言っていたわ。しょうさん呼んだのはまさちゃんなの。」

「はい。しょうさんに頼まれていた物が手に入ったので呼んだのです。」

「しょうさんに何を頼まれたの。」

「それは秘密。後のお楽しみということ。」

高江州はにこにこしながら尚吾に頼まれた物が何であるかを勿体ぶって麻衣子には教えなかった。

「まいさん。私にダイビングを教えてください。」

絵梨は麻衣子に寄ってきて麻衣子にダイビングを教えてくださいるように頼んだ。ウチナーの若者にダイビングが流行している。だから若い絵梨もダイビングをやりたいようになっていた。

「いいよ。しかし、最近は忙しいので海に行く時間がないわ。来月には暇ができるからその時でいいかな。」

絵梨は麻衣子からダイビングを習うことになり、ダイビングに必要な器具について麻衣子は絵梨に教えた。

「こんばんは。」

スナツクのドアが開き髪をぼさぼさにした男の顔が覗いた。

「いらつしゃい尚吾さん。」

絵梨が元気な声で尚吾を迎えた。

「あなた、こっちに座って。」

麻衣子は夫の尚吾を隣の椅子に手招きした。尚吾は麻衣子が居るのに一瞬驚いたが、麻衣子に言われるままに麻衣子の隣に座った。

「尚吾さん。遅かったですね。」

「ああ、ウンボで山を削る方法について高志と話していたんだ。」

「例の山のことなの。」

「ああ、そうだ。」

尚吾と麻衣子の夫婦は港町から五キロほど離れている山腹に住んでいる。山の南側面にさとうきびを植え、きび酢を作る計画を尚吾と麻衣子は実行しようとしていた。しかし、山を階段のような幅の狭いだんだん畑にする計画であったが、山は急斜面になっていて斜面に生えている雑木やすすきをウンボで排除して階段のような段々畑を作る作業が困難な壁にぶつかっていた。

「だんだん畑は作れそうにないの。」

「いや。作れる。しかし、中腹あたりの畑はウンボの車体幅の畑にしなければならぬようだ。普通のウンボだけではなく小型ウンボがなければ作業を進めることができない。明日小型ウンボを運び入れることにした。」

「赤土の流出対策は大丈夫なの。」

「そうだなあ。それはだんだん畑が完成して大雨が降らない限りは大丈夫かどうかなんとも言えないな。」

ウチナー島の土のほとんどが粒子の細かい鉄分の多い赤土だ。山や荒地を開墾する時に剥き出しになった赤土が雨水に流されて海に出してしまう。粒子の細かい赤土は海を汚し珊瑚を死滅させてしまうので山や荒地を開墾する時には赤土が海に流出しないように工夫しなければならぬ。海が好きな麻衣子は赤土流出に神経質になっていた。

「しょう。それはないよ。赤土流出は完璧に防ぐと言ったじゃない。」

麻衣子は強い口調になった。

「完璧完璧というなよ。現実には完璧というのはない。マスター、酒をくれ。」

尚吾は麻衣子に責められて不機嫌になった。

「あ、尚吾さん。酒ですね。どの酒を出しましょうか。」

「そうだなあ。今日は何にしようかな。あわもりであればなんでもいいのだが。」

あわもりというのはウチナーの酒の通称である。日本酒とか焼酎とかウォッカとかウイスキーと同じ類の意味だ。

「今度、この町の酒造会社が新しい酒を出しましたが、その酒にしますか。」

「その酒は古酒なの。」

麻衣子が横から口を出した。

「い、いえ。古酒ではないですまいさん。はい。」

「しょう。私も飲むのだから古酒にして。」

尚吾は酒好きというより酒飲みなのである。うまさまずさを問わずどんな酒でも飲んだ。麻衣子は尚吾とは違い酒をあまり飲まないが、飲む時は酒の美味さにこだわった。

「そうだな。マスター。古酒でおいしいのはあるか。」

マスターが返事をしようとした時にママの美紗子がマスターを押しつけて、

「十五年古酒があります。滅多に手に入らない古酒ですよ。ヤンバルの酒名人が造ったとても風味のいい古酒です。」

「まい。ママさんお勧めの古酒にしようか。」

「そうしましょう。」

マスターとママはいそいそと酒の準備をした。マスターは550ml瓶の古酒とコップにミネラルウォーターを出し、ママはキッチンで木綿豆腐にカラスグアーを添えた小皿を出した。カラスグアーというのはあいごの稚魚を塩漬けにした肴で昔からウチナーの人々に親しまれている食品である。カラスグアーは酒の肴にもってこいだ。尚吾と麻衣子は並々と酒が注がれたコップをカチンと合わせてお互

いの労をねぎった。

「赤土流出を完璧に防ぐことはできないの。」

「というより、さとうきび畑が完成して雨が降らないとなんとも言えない。赤土流出対策を完璧にやったとしても相手は自然だ。予想できないミスは有り得る。雨量が多い時には赤土流出を覚悟しないとね。そして新しい対策を実行していく。その積み重ねが自然との付き合いには必要だ。」

麻衣子はコップを両手で掴んでゆっくりと口に傾けた。

「ああ、おいしい。ぬちぐすいやっさー（命の薬だ）。」
と言つて麻衣子は幸せな顔をした。

「さとうきびを山の斜面に植えるというのはいいアイデアでしょう。」

山の斜面にさとうきびを植えるというアイデアは麻衣子の口から出た。麻衣子に言わせるとススキが繁茂しているのだからススキに似ているさとうきびも繁茂するだろうという単純な根拠から山の斜面にさとうきびを植えることを思いついた。斜面なら太陽の恵みをたくさん受けて糖度の高いさとうきびを収穫できると麻衣子は確信している。太陽のエネルギーをたっぷり含んださとうきびからきび酢を作れば質の高い健康酢が作れるというのが麻衣子が山の斜面にさとうきびを植える理由である。

尚吾は山の斜面を開墾してさとうきびを植えることに最初は乗り気ではなかった。山の斜面では養分が少ないしそれに風をまともに受けるからさとうきびの成長は悪い。収穫量が少ないから収入も少ないというのが尚吾の見解だった。しかし、尚吾は麻衣子のアイデアを聞いた一週間後に麻衣子のアイデアである山の斜面にさとうきびを植えることに賛同した。きび酢を作るためなら大量のさとうきびを生産する必要はない。山の斜面に植わっているさとうきびの写真を見ればインターネットのホームページに掲載して、ウチナーの太陽エネルギーを十分に吸収したさとうきび健康酢として宣伝して売り出せばよく売れるだろうと考えたからだ。麻衣子が言うような質の高い

健康酢が作れるということには尚吾は疑問であったが、山の斜面に植わっているさとうきびは太陽のエネルギーを一杯吸い取っているというイメージがあるし、斜面に植わったさとうきびの映像はイメージ戦略としてはかなり効果がある。さとうきびを山の斜面に植えてインターネットで宣伝するのはいいアイデアだと尚吾は思った。「うん、いいアイデアだ。しかし、赤土流出防止のだんだん畑を作るのは俺だぜ。苦勞するよ。」

「だって私は畑のことはよく知らないお嬢様育ちだもの。農民の子のあなたが畑作りを担当するのは当然よ。」

「おいおい、俺たちは二十年以上も農民生活をしているのだ。なにを今さらお嬢様育ちだよ。」

「でもしよは農民の子供よ。しよは子供の頃から農業を経験したけど私が農業を経験したのは二十五歳からよ。私としよには農民の経験年数の差が二十年以上もあるわ。その差は永遠に埋まらない。あなたは農民育ち。私はナーファのお嬢様育ち。農業についてはあなたが大先輩よ。そうでしょう。」

と麻衣子はいたずらっぽく笑いながら尚吾のコップに自分のコップをカチンと合わせた。

麻衣子にそう言われると尚吾に返す言葉がない。鶏の世話やハーブや野菜を育てる仕事はほとんど麻衣子がやっている。尚吾はインターネットのホームページを管理して麻衣子が収穫した鶏卵やハーブや野菜をインターネットで販売する仕事をしている。畑仕事をしているのは麻衣子である。麻衣子が「あなたは農民育ち。私はお嬢様育ち。農業についてはあなたが大先輩よ。そうでしょう。」と言ったのは軽い冗談なのだから本気になって言葉を返すわけにはいかない。尚吾は苦笑いするしかない。

麻衣子が那覇の資産家の娘であり尚吾が中部の農家の息子であるのは事実だしそのことは麻衣子と尚吾しか知らないのだからこれ以上その話題にこだわるとスナックの空気になじまない。というより尚吾には軽い冗談の掛け合いをするセンスがない。

麻衣子と尚吾は山を開墾してパイン畑を作り、自然飼いでいる鶏の卵を売って生活をしていたが、パイン産業が下火になってきたので麻衣子が趣味にしていたハーブをパインの代わりに育て、尚吾はそのハーブをインターネットで販売することを十年前から始めていた。そして、麻衣子の提案としてさとうきびを育ててきび酢を作ることも始めることになったのだ。

「だんだん畑はいつ頃には完成するの。」

「一ヶ月後には完成するよ。」

「頑張つてね、しょう。」

麻衣子にはつこり笑うと尚吾のコップに自分のコップを合わせた。

「しょうさん。例のものを出しましょうか。」

高江州は尚吾に言った。

「そつだ。忘れていた。」

と尚吾が言った時、勢いよくドアが開きアキが入ってきた。

「まいさん。今日は感激したー。」

と入り口から一気に駆けて来て麻衣子の隣に座った。そして十数枚の写真をカウンターの上に広げた。写真には海中を泳いでいるジユゴンの姿が写っていた。アキはヤンバルの海に潜り、滅多に見ることのできない絶滅の危機にあるジユゴンに生まれて初めて出会ったのである。ジユゴンとの遭遇は多くのダイバーたちの悲願である。

千歳一隅のジユゴンとの出会いにアキは興奮していた。

「まいさんが教えてくれたダイビングスポットに潜ったらジユゴンに会えた。今日は人生最高の喜びの日よ。」

ダイビング仲間がデジタル水中カメラでジユゴンの写真を撮りプリンターでカラープリントしたのをアキは麻衣子に見せるために持って来たのだ。アキは自分の喜びをスナックの全員に分け与えようと皆に写真を配った。

「かわいい。」

絵梨はジユゴンの写真を見えますますダイビングがやりたくなった。「私も海に潜ってジユゴンを見たい。まいさん。私にダイビングを

教えてよ。」

「かわいいでしよう。潜れるようになったら絵梨さんをジユゴンの寄る所に連れて行ってあげるわ。でもジユゴンには滅多に会えないのよ。アキは運がいいわ。」

アキを中心にスナツクはジユゴンの話で華を咲かせた。

「アキ。」

入り口に大きな白人がもじもじしながら立っていた。大きな白人はアキが連れてきたダイビング仲間で名前はジョンといい、アメリカ海兵隊の兵士である。

「ジョン、カモーン。」

アキと呼ばれてジョンは回りの客に「どうもどうも。」と言い、頭をペコペコしながらアキの側に来た。君が日本人ならアメリカ人のジョンが頭をペコペコしたというのが信じられないかも知れない。アメリカが支配しているといってもいいウチナーではアメリカ人はいつも胸を張り威風堂々としていると予想しているだろう。それは間違った理解だ。

世の中にはいい人間も居れば悪い人間も居る。気の強い人間も居れば気の弱い人間も居る。威張る人間も居れば腰の低い人間も居る。善意の人間も居れば悪意の人間もいる。ウチナーに居るアメリカ人もそんな世の中の人間の一人でしかない。ジョンは普通のアメリカ人の若者である。見知らぬスナツクにしかも知らないウチナーンチュ（沖縄の現地人）の中に一人で参加するのはジョンにとって心細いし不安もあるのだ。

郷に入らば郷に従えという諺がある。その諺とは全然関係がないが郷に親しんだ者は郷の癖が身につくという現実がある。ジョンは日本人のダイビンググループと行動するようになったがジョンが仲よくなった日本人にはいつもペコペコする癖があり、ジョンは彼の癖が移ってしまい日本語を話す時にはペコペコする癖が身に着いていた。まあ、ジョンみたいにペコペコするアメリカ人は少ないけどね。「まいさん。ダイビング仲間のジョン。ジョン、この人がまいさん。

「どうも、始めまして。」

ジョンは麻衣子にぺこりとお辞儀をした。ジョンはアキの隣に座った。

「ジョンはなにを飲むの。アワモリがいいかな。」

「ノー。私アワモリは飲めない。」

ジョンは苦虫を潰したような顔をしながら手を横に振った。

「バドワイザーありますか。」

ジョンはバドワイザーを注文した。

「バトワイザーは昔からありますよ。」

マスターはジョンにバドワイザーを出した。

明るくて華やかなアキを中心にスナックはジユゴンの話題で充満した。スナックの中は賑やかになった。

「ジユゴンの保護の為にヘノコの海にヘリコプター基地を作るのは反対よ。ウチナーの海を汚してはいけないよ。そうよねジョン。」
ジョンもスナックの雰囲気打ち解けてきていた。ジョンは日常会話ができる程度の日本語は習得していた。

「え、なんですか。」

「ヘノコよヘノコ。あそこにアメリカ軍のヘリコプター飛行場を作ろうとしているでしょう。それは反対と言っているの。」

「ああ、ヘノコね。僕も反対です。海はきれいが一番。日本の政府もアメリカの政府も間違っています。」

「まいさんも反対でしょう。」

「勿論反対よ。」

アキはヘノコの海のヘリコプター基地建設に反対を主張しながらスナックの全員に賛成か反対かを聞いて回った。美人で気の強いアキが賛成か反対かを聞いて回ったから全員がアキの意見に賛成し、話は盛り上がった。

ジュゴンはグロテスクと尚吾言った。ぞー。

君はヘノコの海のヘリコプター基地建設については知らないだろうから説明をしておこう。ウチナーは反戦平和運動がとて盛んな島だ。なにしろ第二次大戦の時はアメリカ軍が沖縄に上陸して烈しい地上戦が行われ十万人近くのウチナーの民間人が殺された。いいか、軍人ではなくて武器を持たない民間人が多数殺されたのだ。ウチナーの人々が戦争アレルギーになるのは君も理解できるだろう。

ウチナーの人々はアメリカ軍基地撤去を叫び続けているがアメリカ軍基地は戦後六十年以上もウチナー島に居座り続けたままだ。戦闘機の墜落、油漏れ、爆音等々の基地被害は多い。その中でもアメリカ兵たちの犯罪は数多く、米兵三人による少女暴行にとうとうウチナーの民衆の怒りが爆発し一九九五年の十月には8万5000人の反米軍基地大集会が開かれたのだ。ウチナー民衆の怒りに慌てた日本政府とアメリカ政府はウチナー民衆の怒りを静めるために基地の統合・整理をすることを宣言した。それで住宅街と密着しているフテンマヘリコプター飛行場はヘノコの海に移すことを日本政府は決めた。

ところが今度はヘノコの住民や漁師や反戦平和運動家や環境保護を訴える人々がヘノコの海にヘリコプター飛行場建設に反対の狼煙を上げたのだ。ヘノコの海には美しい珊瑚礁があり珊瑚礁が破壊されるのに大反対というわけだ。そして、ヘノコにヘリコプター飛行場を建設すると決まった後に、ヘリコプターでヘノコの海を撮影している時にヘノコの海の沖を遊泳しているユゴンを発見したのだ。ジュゴンは絶滅危機の動物であり世界保護動物に指定されている動物である。ヘノコの海のジュゴンを守るうという機運が出てきた。そうなるとうヘノコ基地建設反対運動はますます勢いづき国際環境保護団体グリーンピースも反対運動に加わるようになったからさあ大変

だ。

一方ウチナー県の知事はヘノコのヘリコプター飛行場はアメリカ軍が使用するの十五年限定にし、十五年過ぎたら民間飛行場にするという条件をつけたものだからアメリカ軍はヘノコに移転することを渋ってしまった。政治の世界はとにかくややこしい。私は書きながらなにを書いているのか頭がこんがらがってくる。

とにかくアメリカ軍、日本政府、ウチナー県知事にアメリカ軍事撤去運動や平和運動や環境保護団体やヘノコ住民などが五つ巴やら七つ巴となって現在のところヘノコのヘリコプター飛行場建設は遅々として進んでいない。

どうだウチナーという島は国際的だろう。資本主義国家と社会主義国家が対立している分岐線にウチナー島があるものだから、ウチナーという島は世界の先端の政治、軍事、環境が絡み合って渦巻きのようになっているのだ。まあのかな生活を送っているきみには理解できないだろうが、ウチナー島の人々は第二次世界大戦が終わって六十年の間、戦争危機の恐怖の狭間で汲々として生きてきたのだ。アメリカ、ロシア、中国、ヨーロッパ、中近東の政治情勢に一番敏感な庶民は世界の中でウチナー島の人々なのかも知れない。ウチナー島は退屈とは無縁であり、日々世界の危機の試練と闘いながら過ごしている島なのだ。

スナックワリガミはジュゴンとヘノコのヘリコプター飛行場建設反対の話で盛り上っていたが、尚吾独りだけはアキに聞かれても賛成とも反対とも言わず「ああ。」と生返事をし、盛り上がりを見捨てるように黙って酒を飲んでいた。

「しょうさん。話も盛り上がっているし例のものを皆に食べてもらいましょよ。」

高江州は尚吾に言った。スナックの中で一人だけ盛り上がっていない尚吾は「ああ。」と生返事をした。高江州はマスターを呼んだ。

「マスター。預けてあるのをさ。焼いてくれないか。」

「え、紙袋にはなが入っているのか。」

高江州は得意げである。

「恐らく、マスターが一度も食べたことがない魚だよ。開けてみたら分かるから。早く焼いて。そして皆で食べて楽しく語り合おう。」

「分かった。それじゃ、魚を焼くよ。」

マスターは紙袋に入っていた魚を焼いた。

魚は全部で十匹だった。マスターとママは焼いた魚を五皿に二匹づつ並べ、大根おろしを添えて出した。スナツクの連中は魚を食べながら魚の正体について話し合った。

「キスかな。いやキスではないな。」

「サンマじゃないのか。でもこの味はサンマではないな。サンマにしては淡泊な味だ。」

焼き魚を賞味しながら魚の正体をそれぞれが模索したが誰も魚の正体を言い当てる者はいなかった。ウチナーで魚と言えば海魚のことしか頭に浮かばない。淡水魚が食卓に出るといことはほとんどない。高江州が紙袋に入れて持ってきたのは川魚であった。

「この魚は川魚です。」

「フナなの。」

「それとも鯉。」

川魚といえばフナと鯉しかウチナーの人は思い浮かばない。

「その魚は鮎です。」

高江州は得意げに言った。

「え、鮎。」

鮎という魚はウチナーには棲息していないはずだとスナツクの誰もが思っていた。

「本土から取り寄せたの。」

「いえ、違います。この鮎はウチナーの鮎です。正真正銘のリューチュー鮎ですよ。」

戦後のウチナー島は川が汚れてしまったために鮎は絶滅した。しかし、奄美大島に住んでいる鮎をリューチュー鮎と呼んでいるように

ウチナー島には鮎が生息していたのだ。

十年前から北部のハネヅ川で絶滅したリューチュー鮎を復活させようという運動が起こり、奄美大島に棲息するリューチュー鮎の稚魚を取り寄せてハネヅ川やダムや養殖池で鮎の再生を試みた。そしてリューチュー鮎の養殖に成功し、今では居酒屋などにリューチュー鮎を出荷するまでになっている。

焼かれた鮎を食べながらスナックの皆が話に花を咲かしている時に尚吾はカウンターにあるジユゴンの写った写真の一枚を取り、写真を見ながら、

「なんてグロテスクな奴だ。」

と呟いた。尚吾の呟きにスナックは一瞬静かになった。

「なにがグロテスクなの。」

麻衣子が聞いた。

「ジユゴンだよ。希少な存在だからいいが、こんな奴がウチナーの海にうじゃうじゃ居たら俺は気味が悪くて海に行けないね。」

「ジユゴンがグロテスクだというの。」

麻衣子が言った。やや厳しい声だ。

「イルカなら可愛いけどね。ジユゴンは肌色も悪い。ぶよぶよしてグロテスクだ。それに比べて鮎は美しい。キスやチンやイーグアー、グルクンなどの魚は美しい。高江州。ジユゴンを食べる気になれるか。こんなグロテスクな姿を見れば食べる気になれないよな。」

高江州は尚吾に話を振られて返事に困った。ジユゴンを食べる気になれるかと聞かれればジユゴンを食べる気になれないと答えるのは当然だ。そもそもジユゴンを食べるといふ発想が高江州の頭の中にはなかった。それに、ジユゴンが可愛いと言われればそんな気がするしグロテスクと言われればグロテスクであるような気もする。つまりは高江州にとってジユゴンが可愛いかグロテスクであるかはどうでもいいことなのだ。ジユゴンの話題で酒の宴を楽しめばいい。

「はあ、なんとはいいいか。僕にはどうも。」

高江州は返事に困った。白けた空気がスナックに澱み始めたのを解

消しようマスターは、

「まあまあ、しょうさん。」

と寄って来て、

「鮎を始めて食べたけど風味のある魚ですね。ウチナーに鮎が居るとは驚き桃の木シークワーサーの木です。」

と白けた場を持ち直そうと冗談交じりに話したがその効果はなく麻衣子は黙りアキは尚吾を睨んでいる。

「鮎はねマスター。ウチナーの川に鮎を再生させただけではなく、数を増やして食べれるまでになったのだ。つまり単なる再生のためのお金の消費だけに終わらず生産してお金を生み出すまでになったのだ。人間と自然との最高の関係だよ。」

きみ。きみは尚吾は社交性に欠けたひねくれ者だと思っているだろう。確かに尚吾は社交性には欠けている。しかし、ひねくれ者と思うのは間違いだ。ジュゴンの話で皆が楽しく賑わっているのを気に入らないので楽しい雰囲気壊す目的で尚吾がジュゴンのことをグロテスクと言ったと思ったら間違いだ。尚吾は本当にジュゴンをグロテスクとっていて、グロテスクなものを可愛いと言っているのは間違っているのに他の人間たちが可愛いなどと言うものだからそれは間違いでジュゴンはグロテスクであると正当な判断をするべきであると尚吾は言いたいのだ。

私も尚吾に近い考えなのだが。私なら盛り上がっている宴を壊さないためにジュゴンがグロテスクだなんて決して言わない。目が可愛いとか海藻を食べている仕草は赤ちゃんが哺乳瓶を抱えてミルクを飲む仕草に似ていて可愛いとか言って盛り上がっている宴をもっと盛り上げるように努力する。ところが尚吾は違う。グロテスクなものグロテスクでありグロテスクなものを可愛いと言うのは気に入らないのだ。

ところできみはジュゴンを知っているかい。ジュゴンは人魚のモデルだと言われている。あの美しい人魚のモデルだよ。きみがジュ

ゴンを知らないのなら人魚が変形した海の中の哺乳動物を想像したまえ。きつと人魚姫に似た美しい姿をイメージするだろう。もしきみが人魚姫のような美しい姿をイメージしてジュゴンにあこがれるならきみは一生ジュゴンを見ない方がいい。その方がジュゴンに幻滅しなくてすむ。

もしきみがジュゴンを知っているならジュゴンが人魚のモデルとなったことに納得するかい。恐らく納得しないだろうね。人魚姫とジュゴンでは美しさにおいては雲泥の差がある。きみはそう感じた筈だ。ジュゴンが海藻を食べる仕草は赤ちゃんが手で物を食べている仕草に似ている。赤ちゃん（またはさる）の物を食べる仕草が似ていることが人魚のモデルになったんだらうね。しかし、グロテスクなジュゴンの姿を見ればジュゴンが美しい人魚のモデルではないということにはつきり言える。ところが、ジュゴンは人魚のモデルとなったという噂は定着している。人魚は美しい。人魚が美しいのだからジュゴンも美しい、と言いたいところだが本当のジュゴンはグロテスクである。それなのに可愛いと言うレットルをジュゴンに貼っているのは間違いであるし許せないと尚吾は思っているのだ。だからジュゴンを可愛いと言う人間は嘘をついているし尚吾はそのことが不愉快なのである。

なぜウチナーでジュゴンが注目されるようになったか。実はそのことにも尚吾が敢えてジュゴンはグロテスクであると断言したい理由になっているのだ。ヘノコの沖に普天間ヘリコプター基地の代替として飛行場を作ることになった。そういうことになれば当然アメリカ軍基地反対運動の人々や自然環境を守る運動をしている人々はヘノコの海にヘリコプター基地を作るのに反対する。軍事基地の強化、騒音被害に海環境破壊が基地建設反対の理由だが。反対の理由はひとつでも多い方がいい。だからヘノコの沖で発見されたジュゴンは大きく新聞に掲載され、ヘノコの海にヘリコプター軍基地反対の理由のひとつに日本の天然保護動物に指定され世界絶滅保護種にも指定されているジュゴンの保護も付け加えられた。ジュゴンが

注目されたのはその時からだ。ヘノコにヘリコプター基地建設の話が持ち上がらなければジュゴンがウチナー近海に棲息しているという事は注目されることはなかったのかも知れない。その証拠にジュゴンがウチナー近海に棲息しているという噂は昔からあったかどうかはつきりしない。ただジュゴンの棲息北限はウチナーだろうという噂はあったが本気でジュゴンの調査をやった人間は一人も居なかった。つくりジュゴンの調査なんてことは一度もなかったんだ。当然ジュゴンのための藻場造り運動の話も一度だってなかった。ヘノコのジュゴンが噂になったのはヘノコヘリコプター飛行場建設の話が持ち上がったからなのだ。それ以前はヘノコの海のジュゴンについて話題になったことは一度もない。

仲宗根元校長八十三歳登場

尚吾が気に入らないのはヘノコの海に飛行場を建設することに反対をする理由にジュゴンを利用して人間達の偽善に対してであった。ジュゴンはウチナー近海に十数頭は居るだろうというのが専門家の推測だ。確認ではないよ推測だよ。その十数頭もウチナーのどこに住んでいるのかは誰も知らない。ウチナーの海の沖を泳いでいるのを漁船や飛行機が見つけたことはあるが、ウチナーの海岸で見たことはない。つまりウチナーの海岸に棲息しているジュゴンは一匹もないということだ。それなのにヘノコの海をジュゴンの里と呼んでいる。ヘノコの海にいつもジュゴンが居るかというところではなく一年に一回見るかどうかなのだ。それなのにジュゴンの里と呼べるのかと尚吾は不満を持っているのだ。たった十数頭しかウチナー近海に居ないだろうと言われていたジュゴンをウチナー近海に棲息している動物として認めるわけにはいかないと尚吾は考えている。フィリピンあたりの南の海に棲息しているジュゴンがウチナーに旅行してきたのだらうと尚吾は考えている。だから尚吾は人間の都合でジュゴンの里などと呼ぶのは政治的に利用していると嫌悪しているのだ。

本気で絶滅危機動物と言われているジュゴンを保護したいのなら、ヘノコの海にヘリコプターの飛行場を建設する話が起きる以前にウチナーのジュゴンの生態を調査しているはずであるしウチナーのジュゴン保護区が存在していたらう。もし、ヘノコの海に飛行場建設の話がなかったならジュゴンの保護地域にヘノコを主張することになっていたかどうか分からない。もし西海岸のナゴ湾にヘリコプター基地を作る話が出たらナゴ湾がジュゴンの里になっていただろうというのが尚吾の見解なのだ。私の見解ではないよ。尚吾の見解だからね。それを忘れないでくれ。

「この鮎はねマスター。ウチナーの川に鮎を再生させたただけではなく、数を増やして観賞用だけではなく食べれるまでになったのだ。つまり単なる再生のための金の消費だけに終わらず生産してお金を生み出すまでになったのだ。人間と自然との最高の関係だよ。」

「ジユゴンなんてグロテスクで食べる気にもなれない。きっとジユゴンの肉はまずいだろうな。」

尚吾がスナックのみんなに聞こえるようにわざとらしい大声で言ったものだからスナックの空気が白けたと同時にいくつかの目が鋭く尚吾を睨んだ。尚吾の言葉にマスターの体は凍り付いてしまい白けた場を盛り上げる言葉なんて思いつきようもない。

「食い意地が強い人間は嫌だな。」

と言って麻衣子は皮肉たつぷりの口調で言うとコップの酒を一気に飲んだ。

「食い意地だけが強くて美意識が欠落している人間は嫌いだね。」
と言って麻衣子は空になったグラスに酒を注いだ。

ジユゴンを食べる話にはアキはかーっとなった。ジユゴンがうまいかまずいかなんて発想すること事態が間違っている。海の汚染で絶滅の危機に瀕しているジユゴンを絶滅させないためにどうすればいいのかジユゴンのテーマであるし、ジユゴンの話はそこに尽きる。

ジユゴンが可愛いかわろてスクであるかは意見が分かれてもアキには我慢ができる。しかし、絶滅寸前のジユゴンを食べる話は絶対に許せない。

感情の激しいアキはコップをカウンターに叩き付けた。アキがコップをカウンターに叩き付けたのでジョンは驚いた。アキに英語で「どうしたのか。」とアキが怒っている理由を聞いたが怒っているアキがいちいちジョンに説明するはずがない。

「ジユゴンを食べるなんて信じられない。絶滅するかも知れないかわいそうなジユゴンを食べるなんて人間じゃないわ。」

「アキ。しょうはジユゴンを食べるとは言っていないわ。」

アキの怒りを静めるために麻衣子が尚吾を弁護したがアキの怒りは収まらない。

「そう、食べるとは言っていない。グロテスクで食べる気になれないと言っただけだ。」

尚吾は酒をゆっくりと飲みながら言ったがアキの怒りは収まるどころか尚吾の悠然とした態度にますます怒りが高ぶってきた。

「同じことです。食べたいなら食べると言っている。」

「食べる気になれないのにどうして食べることになるのだ。」

「だから食べる気にならないから食べないということは食べる気になればジユゴンを食べるということじゃない。」

「グロテスクで食べる気になれないのだから食べないということだ。」

「

尚吾の天邪鬼な言い方に単純な性格のアキは怒った。立ち上がって強引に麻衣子と席を代わり尚吾の隣に座った。マスターはアキと麻衣子が席を代えたのでほっとした。麻衣子と尚吾が喧嘩するよりはアキと尚吾が喧嘩をした方が穏やかになるとマスターは知っているからだ。麻衣子は隣のジヨンにせがまれてアキと尚吾の言い争いの内容をジヨンにも分かるようなやさしい日本語で説明した。

「ジユゴンの問題は食べる食べないの問題ではないでしょう。」

アキが突っ込むと尚吾は、

「そうかなあ。」

とはぐらかす。

「そうですね。しょうさんは時代遅れ。いいですか。ジユゴンは絶滅の危機にある希少動物なのよ。皆で保護して大事にしなければならぬ動物なの。しょうさんはそのことを知らないでしょう。」

「知らないなあ。」

尚吾はアキを小ばかにしたような態度でにやりとしながら答えた。

「知らないなあ。」と尚吾に言われてアキは怒るよりもジユゴンを保護しなければならぬことを尚吾に理解させようと必死になった。「いいですか。タイでは国がお金を出して保護するようになってい

るのですよ。漁師もジユゴン保護に協力しているくらいだから。」
「ふうん。タイの漁師が保護に協力しているのはいやいやながらじゃないか。」

「しょうさん。私怒るよ。」

尚吾の気の無い対応にマキは苛々してきた。尚吾は悠然としてアキのコップに酒を注いだ。

「アキ。落ちつきなよ。さ、飲んで。」

アキは尚吾に薦められて一気に酒を飲んだ。

「ほう、いい飲みっぷりだ。このあわもりはうまいだろう。十五年物の古酒だよ。」

「うわー。柔らかくてこくがある。あわもりがこんなにおいしいなんて始めて知ったわ。」

酒のおいしさにアキのイライラがすーっと消えた。おいしい酒を飲んでアキの怒りが消えたと書いたことに君は半信半疑かも知れないでもアキは熱しやすく冷めやすい性格をしているのだ。怒ったかと思えば笑い。笑っているかと思えば怒る。アキはそんな女性なのだ。麻衣子の説明を聞いていたジョンが「オーノー。」と叫んだ。立ち上がって尚吾に「ユーアークレイジー。」と言い、高江州をどかし、て尚吾の側に座ると怒って英語でまくし立てた。ジョンがまくし立て終わる頃に、

「アイドンノー イングリッシュ。」

と尚吾は言った。英語を知らない人間に英語をまくし立てたジョンは「ソーリー。」と言ってぺこりしてからたどたどしい日本語で尚吾を責めた。

「尚吾さん。あなたの頭はおかしいです。大変クレイジーです。ジユゴンはかわいそうな動物。皆死ぬかも知れない。みんなで大切にするものです。ジユゴンを食べるなんてとってもクレイジー。ジユゴンは皆で親切にするものです。尚吾さんの頭はクレイジーです。」
「ジョンはジユゴンが好きなのか。」

「とても好きです。とても可愛いです。」

「ジョンはジュゴンは何回見たのか。」

「今日始めて見ました。」

「アキは何回見たのか。」

「私も今日が初めてよ。滅多に見れるものではないわ。」

「滅多に見れないものを見たから感動したのだから。」

「そうよ。」

「ウチナーの海岸にジュゴンがうじゃうじゃ居たとしたら感動なんかしないよな。むしろ迷惑がるのじゃないか。」

アキは口ごもってしまった。

「ジュゴンが希少動物で絶滅保護指定されているから、滅多に見ることができないからジュゴンを見て感動するしあんなグロテスクな動物を可愛いなどと言うのだ。ウチナーの海岸にジュゴンがうじゃうじゃ居るのを想像してみる。気味が悪いよ。ジュゴンよりキスとかかつおとかガーラとか魚らしい魚がうじゃうじゃいた方がいい。そう思わないかアキ。うじゃうじゃ居たらのことだよ。」

尚吾は「うじゃうじゃ」を何度も強調した。尚吾は何度も「うじゃうじゃ」と言い、「うじゃうじゃ。」を何度も聞いているうちにアキは気分が悪くなってきた。

きみも想像してごらん。海岸に銀色の腹の魚が群れを作つてすいすい泳いでいる海岸の光景とジュゴンがゆっくりと群れて海藻を黙々と食べてうじゃうじゃと群れている海岸の光景ではどちらが美しいか。アキは素直な女だから尚吾に言われた通り海岸にジュゴンがうじゃうじゃいる光景をイメージしたから気分が悪くなってきた。海岸がジュゴンで埋まり海面はジュゴンの肌色である灰色だらけになった海。とてもじゃないが美しい光景とは言えない。尚吾の言う通りジュゴンが海岸にうじゃうじゃ居たら感動するより迷惑な存在になってしまう。海岸にグロテスクなジュゴンがうじゃうじゃ蠢いている情景を想像したアキは吐きそうになった。アキは尚吾の巧みな話術にはまり意気消沈した。

「ジュゴンがかわいいと感じるのはジュゴンが希少動物だからだ。」

絶滅の危機に瀕しているジユゴンを保護しようという気持ちを表に出して自分が善意の人間であるということを他人に思われたいという卑しい心があるからだね。」

アキは尚吾の理屈にしゅんとなった。スナツクは白けた雰囲気になった。尚吾の言葉はアキを苛める理屈だと常連客の金城や諸味里や池間は知っているが、アキの味方になって尚吾に反撃したくても誰も尚吾の屁理屈には勝てそうにない。皆はアキに同情したがアキの味方にはなれなかった。

「君、名前はなんと云うのかね。」

奥のカウンターに座っている老人が尚吾に声を掛けた。老人は年齢八十三歳の中曽根元校長である。あらぬ方向から呼びかけられた尚吾はお前なんぞに名前を語る筋合いはないとばかりに仲宗根元校長を一瞥すると仲宗根元校長を無視して酒を飲んだ。尚吾の代わりにスナツクのママ美紗子が中曽根元校長に尚吾の名前を教えた。

「尚吾君。君には地球を愛する心がない。自然を愛する心がない。ジユゴンはとても繊細な動物なんだ。きれいな海に住むことしかできないのだ。人間の強欲な開発で海が汚れたためにジユゴンの数は減っていったのだ。ジユゴンが稀少な存在になってしまったのは人間の性なのだ。人間の罪なのだ。人間に地球を愛する心。自然を愛する心があればジユゴンも絶滅の危機に瀕することはないのだよ。」

尚吾君のような人間がジユゴンを絶滅させるのだよ。」
威厳のある仲宗根元校長のご意見に尚吾以外の人間は頷いた。尚吾は仲宗根元校長の意見を無視して焼いた鮎をおいしそうに口にほおばり酒をぐいっと飲んだ。

「うまいなあ。」

尚吾が自分を無視して鮎をおいしそうに食べるものだから中曽根元校長の口調が強くなった。

「ジユゴンの保護は世界的な流れになっているのだよ。ウチナーの海に何頭のジユゴンが生息していると思うかね君。たったの十六頭

だよ。十六頭しかウチナーの海に棲息していないのだよ。なんとも悲しい現実だよ。人間の悪の欲望がなせることだよ。」
マキはウチナーの海に十六頭のジユゴンしか棲息していないことに愕然とした。

「十六頭しかいないの、おじいさん。」

おじいさんと言われて仲宗根元校長はむっとした。孫やひ孫におじいさんと言われるのは仕方がないが大人の世界で論争をする時はおじいさんと言われたくない。おじいさんと言われることによって自分の考えが老人のたわ言と思われることを中曾根元校長は非常に嫌った。

「君の名前はなんと言うのかね。」

「アキです。」

「アキさん。私にはれっきとした中曾根という名前があります。おじいさん呼ばわりは不愉快ですな。」

「すみません。仲宗根さん。ウチナーの海にはジユゴンは十六頭しか棲息していないというのは本当ですか。」

「最近調査して十六頭はいるだろうということだ。」

アキはジユゴンの絶滅をますます心配した。一体ウチナーのジユゴンはどんなペースで減っているのだろうか、アキはとても気になった。

「十六頭しか居ないの。それじゃあ絶滅待ったなしだわ。仲宗根さん。五十年前は何千頭いたのですか。」

仲宗根元校長の耳にアキの質問は聞こえなかった。校長時代に不都合なことは聞えない振りをする癖があったが八十三歳という老齢になると子供と同じように不都合なことは本当に聞こえなくなっていた。つまり五十年前にウチナーの近海にジユゴンが何頭居たかは仲宗根元校長だけでなくウチナーの誰も知らない。ひよっとすると五十年前も十六頭しか居なかったかも知れない。

アキの言葉が聞こえない仲宗根元校長の演説は続く。

「ジユゴンはきれいな海に育つ海藻しか食べないのだ。ウチナーは

欲望に目が眩んだ人間たちが海岸埋め立てをどんどんやって海を汚した。狭いウチナー島なのに山を切り崩してゴルフ場を作ったり団地を作ったりして開発を進めて赤土を海に流出させて海藻が育たなくなつた。だからジユゴンも減つたのだ。自分たちの生活さえ豊かになればいいという人間の浅はかな欲望がジユゴンを絶滅の危機に追いやつたのだよ。」

仲宗根元校長の意見を聞いてアキは元気を回復した。

「そうですね。ジユゴンは絶滅危機の魚だから守らなくてはならないですよね仲宗根さん。」

アキの言葉を訂正する必要がある。アキはジユゴンを魚だと思つているがジユゴンは魚類ではない。くじらと同じ哺乳動物だ。アキは海で泳ぐものは全て魚だと思い込んでいただけのことだからねきみアキがジユゴンを魚と言つたからきみもジユゴンを魚だと思わないよう気をつけてくれ。

「おお、自然を愛するお人ですな。ええと、あなたの名前はなんと言つたかな。」

「アキです。」

「アキさん。若い人にもあなたのような愛に満ちた人間がいることは嬉しいことだ。私の酒を受けてくれ。」

仲宗根元校長は500mlのボトルを掴んで差し出した。アキは仲宗根元校長の側に座り軽く会釈してからコップを出した。仲宗根元校長の持つボトルから透明の酒がアキのコップに注がれた。

「ありがとうございます。ううん、おいしい。」

酒をぐいっと飲んだアキは幸せな顔をした。

「あなたはどこから来たのかね。」

中曾根元校長は若くて美人のアキが側に座つたので嬉しくなつた。

「ナーファから来ました。」

「ほう、遠路はるばるナーファから来たのか。」

「はい、ジユゴンを見ようと思つて来ました。」

尚吾と仲宗根元校長の緊張した会話がアキと仲宗根元校長の和やか

な会話に転換したのでスナックの雰囲気も和らぎ、それぞれの客がそれぞれの会話を楽しむようになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3713g/>

港町のスナックはてんやわんや

2010年10月28日05時12分発行